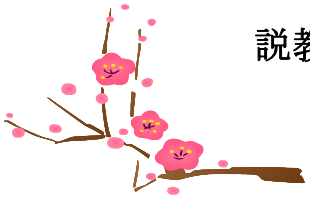


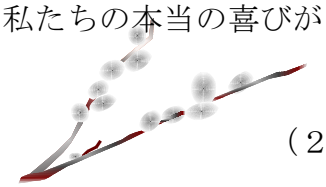
# 説教要旨　「わたしたちの喜び」

ルカによる福音書１０章１７～２４節

村々に派遣されていた七十二人が喜びつつ帰って来て口々に報告をしています。「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します」（17 節）。この七十二人は神の国の到来を宣べ伝え、その印として病気の人や悪霊に取りつかれている人を癒すことができたのです。彼らは、それまでであれば何もできずにただ見ていることしかできなかった悪霊の力の前で、その悪霊さえも屈服させることができたのです。けれどもイエス様はここで、本当に喜ぶべきことはそこではない、「むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい」（20 節）。と言われるのです。

私たち一人一人がどんな働きをしたのか、どれくらい働いたのか、どれだけの成果を上げたのか。そうしたことは私たちの本当の喜びではありません。私たちに与えられる本当の喜びはそうしたことによって左右されないのです。本当の喜びは、私たちの名が天に書き記されていることにこそあるのです。名が天に記されている、それは、神様が、ご自分の救いにあずからせる者として私たちの名を書き記し、その一人一人の名前を覚えてくださっているということです。そしてそのことは、知恵ある者や賢い者には隠され、幼子のような者に示されました。つまり、自分の力に依り頼み、自分の力で何とかできると思っている者、しようとしている者には、名が天に記されているという恵みは隠されているのです。

「幼子のような者」、それは、自分の無力を知っている者、いやもっと正確に言えば、自分の力ではどうにもならない、という現実の中で途方に暮れている者です。先週の箇所の言葉を用いれば、財布や袋や履物を持って行くことではどうにもならない、狼の群れの中に送り込まれた小羊のような自分であることを知っている者です。そのような者にこそ神様は、「あなたがたの名が天に書き記されている」という恵みを示されています。多くの預言者や王たちが、見聞きしたいと欲しながらも与えられなかったものが、私たちには与えられています。ここに私たちの本当の喜びがあるのです。



（２０１９・３・３１　説教者：稲垣真実）